

## 栃木県の高等女学校における女子野球実施の実態の検討

### A Study of the Actual State of Women's Baseball at Girls' High schools in Tochigi Prefecture

赤澤 祐美

Yumi AKAZAWA

#### I. はじめに

国内では大正期の高等女学校において、女子(軟式)野球やインドアベースボール、キツンボールといった女子野球が行われていたことが竹内<sup>1), 2)</sup>や庄司<sup>3)</sup>をはじめとする先行研究<sup>4-6)</sup>により確認されている。庄司は、当時の女子野球は野球を女子向きに改変して実施していたものの、野球は女子に不適切・過激であるとして批判・禁止され、大正末期には衰退し、そのほとんどが見られなくなったとしている。一方で、高嶋<sup>7)</sup>は女子野球に難色を示していた文部省は、インドアベースボールと野球を明確に区別しており、インドアベースボールに関しては女子に不適切とは評価していなかったことを指摘している。そして「1925年以降女子野球はもっぱら校内で行われるようになったためか、あまり話題にされることがなくなったのは事実である」としつつも、「それは女子野球が消滅したことを意味するわけではなく、地方紙や校友会誌を調査すれば、より多くの事例が発掘される可能性があるだろう」と指摘している。また、1930年代における女子軟式野球実施の可能性も示唆されており<sup>8)</sup>、女子野球実施の実態については今後さらなる検討が必要である

と考える。

大正11年発行の『野球界』第12巻第11号には「女子野球夜話」<sup>9)</sup>という記事が掲載されており、名古屋や岡崎、仙台、水戸の高等女学校における女子野球の状況とともに、「宇都宮高女」および「栃木高女」の女子野球についても紹介されている。宇都宮高女は小堀という教員が女子野球チームを組織し、大正9年に黄金時代を作り上げたものの、栃木高女の野球団が問題となった頃から下火になってしまったという。栃木高女は、大正10年の春に同校の先生が野球を女生徒に教えた所、忽ち野球熱が全校生徒に広まり、対クラスマッチも行われたが、学校内外から非難を受け、野球を禁止する事態に至ったようである。

これまでの研究では、「栃木高女」における女子野球実施の実態を検討した研究は見られず、どのようなルールで実施していたのか、またどのような経緯で禁止されたのかについては明らかにされていない。また「宇都宮高女」については、後身校の創立記念誌である『80年史』<sup>10)</sup>、『100年史』<sup>11)</sup>の検討を行ったものの、その実態については明らかにできていない<sup>12)</sup>。

そこで本研究では、「宇都宮高女」および「栃木高女」の学校創立記念誌のみならず校友会誌等

もあわせて検討し、女子野球実施の実態について明らかにすることを試みた。

## Ⅱ. 当該校と後身校の検討

先述の『野球界』の記事にある「宇都宮高女」および「栃木高女」にあたる学校と、それらの後身校について、『栃木県教育史』<sup>13)</sup>から検討した。

「宇都宮高女」にあたる学校は「栃木県立宇都宮高等女学校」であると考えられる<sup>14)</sup>。この「栃木県立宇都宮高等女学校」はその後、「栃木県立宇都宮第一高等女学校」、「宇都宮女子高等学校」、そして現在の「栃木県立宇都宮女子高等学校」に改称している。

「栃木高女」にあたる学校は「下都賀群立栃木高等女学校」（大正6年時）であると考えられる。同史料内でも表記の揺らぎがみられるが、「下都賀群立栃木高等女学校」はその後、「栃木高等女学校」、「栃木県立栃木高等女学校」、「栃木女子高等女学校」、そして現在の「栃木県立栃木女子高等学校」に改称している。

## Ⅲ. 主な検討対象史料

主な検討史料は、各女学校が発行する校友会誌や学校要覧等の史料および、後身の学校が発行する学校創立記念誌とした。具体的には以下に示すとおりである。

宇都宮高女：『会報』<sup>15-17)</sup>、『栃木県立宇都宮高等女学校要覧』<sup>18-20)</sup>、『創立60年』<sup>21)</sup>、『90年史』<sup>22)</sup>

栃木高女：『校友会誌』<sup>23-27)</sup>、『創立65年誌』<sup>28)</sup>、『創立80周年記念誌』<sup>29)</sup>

## Ⅳ. 結 果

### 1. 宇都宮高女

宇都宮高女の女子野球について、先述の『野球界』の記事には以下のように記述されている。

恐らく、女子野球団の先駆をなしたものは、西の名古屋、東で、宇都宮であらう。宇都宮高女には、旧美術学校の庭球の選手であった小堀先生がいて、万難を排して、女子野球チームを組織して、先生自ら之をコーチした。今でこそ女がボールをしても、怪しみはしないが、女子体育の幼稚であった其頃には、突飛な企てとして、世間から手ひどい非難の的となった。小堀先生は、夫れをも意とせず大正九年に、黄金時代をつくり上げたが惜しい哉去年栃木高女の野球団が、問題となった頃から下火になってしまった。

本検討により『野球界』で名前が挙げられている「小堀先生」と思われる教員を確認することができた。職員一覧に「小堀章」という名前があり、この人物は大正2年3月31日から大正11年11月30日まで宇都宮高女の専任教諭として務めており<sup>30)</sup>大正5年11月の時点では、校友会運動部の理事の1人であった<sup>31)</sup>。免許学科は「図画、手工、習字」<sup>32)</sup>で、「国語」や「図画」を受け持っており<sup>33)</sup>、「旧美術学校の庭球の選手であった」という情報とあわせてみても「小堀先生」である可能性が高いと考える。

『創立60年史』において、大正時代の校友会の運動部活動として挙げられているのは、「薙刀体操」、「庭球」、「雑技」、「新興運動」、「旅行遠足」であり、『80年史』や『100年史』では記載のあった「弓術」がみられないなど、多少内容に相違がみられた。「雑技」には円木、ブランコ、蹴球等が、「新興運動」にはバレーボール、バスケットボール、ホップステップエンドジャンプ等が挙げられていた。新興運動は大正14年より新たな試みとして練習を始めたもので、当時の人々を「女生徒がねえ、まあ！」と驚嘆させるほどに進歩的な試みであったようである<sup>34)</sup>。

『野球界』の記事には、「大正九年に、黄金時代をつくり上げた」こと、また名古屋と並び女子野球団の「先駆」をなしたと書かれていることから、

大正9年以前に女子野球チームがつくられたと推察できる<sup>35)</sup>。しかしながら、今回収集、検討できた『会報』は大正5年および昭和2年に発行されたものであり、大正9年前後については検討できず、本研究で検討した史料からは、「野球」や「ベースボール」に関する記述は一切確認できなかった。

## 2. 栃木高女

栃木高女の女子野球について、先述の『野球界』の記事には以下のように記述されている。

去年の春、栃木高女の先生が、野球を女生徒に教へた所、忽ちの内に、野球熱は全校の生徒の間に広まり、球を手にしなないものは一人もないと云ふ有様になった。

元気な女生徒は、やがて対クラスのマッチを始めたりした。まもなく、学校の代表選手もつくらるゝに至った。しかも、栃木高女の野球は、頗る堅実に発達した浮つ調子の所はなく、体操時間に、生徒にキャッチボールをやらせる迄進んだ。けれ共、恐る可き魔の手は、学校の内部にも、外部にもあった。非難攻撃の聲は四面に起こり、終いに、栃木高女は、野球を禁止せざる可からざるに至った。けれ共、学校が如何に、生徒の野球慾、運動慾を抑えても夫れは、無駄であつて、女生徒らは、密かにキャッチボールをやって、せめてもの憂さ晴らしをしてをる。

野球熱は「全校の生徒の間に広まり」、課外活動だけでなく「体操時間」にキャッチボールをするほどまでに、野球が学校内で広く行われていた様子が見て取れる。この記事が掲載されている『野球界』第12巻第11号は大正11年8月に発行されており、ここで言う「去年」は大正10年のことであると考えられる。つまり、大正10年の春に野球を教え始め、長くとも約1年のうちに禁止されたことになる。

栃木高女では大正期に入り運動が奨励され、特に大正6年頃から盛んになっていった様子が伺える。大正8年に発行された校友会誌の、在校生が卒業生に宛てた通信には、当時の運動の様子が次のように綴られている。

規定体操にてはとても満足が出来ず二三年前より課外運動を初め（マ）ました其れは放課後卅分乃至一時間を以て行ひます。其の時は諸先生も御参加遊ばされますデットボール、バスケットボール、ツナヒキ、駈足等汗みどろになっていたしております。特にバスケットは盛んで近頃からは少々面目を改めました<sup>36)</sup>。

またこれに加え、休み時間には追羽根や縄跳びが行われていたことも書かれている。この頃、栃木高女では校舎や寄宿舎の増設のために運動場が狭くなっていたが、大正8年3月に杉並木を除去し、運動場が以前の倍ほどの広さになったこともあり、ますます運動が盛んになっていったようである。また、体育の教員であった廣田善八郎は、『校友会誌』第15号において「体育雑感」<sup>37)</sup>という記事を書いており、1週3時間の体操時間の運動量では不足のため、始業前の深呼吸運動法と終業後の課外運動を実行していることを述べている。課外運動では「深呼吸運動法、テニス、綱引、ボール遊びなるも殊に最も簡にして興味多きバスケットは当校々技とし練習しつゝある」としている。この、週に1回、1時間以内の課外運動は大正6年から実施されていたようである<sup>38)</sup>。

このように、運動が奨励され、テニスやバスケットボールをはじめとする様々な運動が実施されていた様子が伺えたが、「野球」や「ベースボール」を実施していた事実については一切確認できなかった。

今回の検討の中で「ベースボール」という語が確認できたのは、校友会誌第18号の「論説学芸」の中の「体育について」<sup>39)</sup>という論説のみであつ

た。この論説は石橋蔵五郎という人物の体育奨励に関する記事であり、その中の遊戯についての紹介で「遊戯の中でボール遊びは最もよい運動です、ボール遊びはベースボールバスケットボールと教へて(マ)行きますと二百種位あります」と記している。石橋は、日本体育会体操専門学校の教授を務め<sup>40)</sup>、近代女子教育の先覚者<sup>41)</sup>とも言われている人物であるが、ここでは、あくまでもボール遊びの1つとしてベースボールを挙げているにすぎず、栃木高女での女子野球実施との関連について読み取ることはできなかった。

## V. おわりに

本検討では、女子野球を行っていたとされる宇都宮高女ならびに栃木高女における、女子野球実施の実態を明らかにすることを試みた。しかしながら、いずれの学校も、今回の検討史料からは女子野球を実施していた様子は確認できなかった。

宇都宮高女の女子野球実施については、1922年4月の『サンデー毎日』<sup>42)</sup>にも「四国、京都、名古屋、岡崎、宇都宮、長野、仙台等の高等女学校には野球の代表選手すらあって」と、その存在が記されており、野球実施の事実がなかったとは考えにくい。『サンデー毎日』および『野球界』の記事には、「代表選手」がいたという記述も見られるが、代表選手と言っても対外試合が行われていたわけではない。明治末期には既に盛んに行われていたテニスでさえも、対外試合が行われたのは、宇都宮高女で大正11年、栃木高女で大正12年のことであり、これについてそれぞれ「本県及び近県における対外試合の起こり」<sup>43)</sup>、「本校創立以来最初の他校との試合」<sup>44)</sup>としている。

野球実施について一切の記述を確認できなかった理由として、野球の実施が、校友会誌に残すほどのことでもない、一過性の些末なことであった可能性が考えられる。しかしながら、栃木高女においては、対クラスマッチをしたり、体操の時間にキャッチボールをやらせるまでに至ったとも記

述されていることを考えると、野球実施に関する記述が一切見られないことにはいささか違和感を覚える。野球が実施されていたことが事実であるとするならば、校友会誌等に記載することができないほどに、学校内外からの批判が大きかったと考えることもできるのではないだろうか。学校内からの批判についても明らかにするためにも、今後さらなる学内史資料の検討が必要であると考え

## 注および引用参考文献

- 1) 竹内通夫 (2009) わが国における女子野球の歴史 - 明治・大正期を中心にして -, ベースボールジャーナル: 野球文化学会論叢, (10), 8-31.
- 2) 竹内通夫 (2021) 『女学生たちのプレーボール』あるむ発行.
- 3) 庄司節子 (2011) 近代日本における女性スポーツの創造 - 大正期の東海女学生キッソンボール大会への視線 -, 創造とスポーツ科学, 57-71.
- 4) 田中亮太郎 (1995) 日本における女子野球に関する研究 - 女子野球誕生から女史プロ野球成立過程について -, 大阪芸術大学紀要『芸術18』, 119-128.
- 5) 花谷建次、入口豊、太田順康 (1997) 女子「野球」に関する史的考察(Ⅱ) - 日本女子野球史 -, 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, 45 (2), 289-302.
- 6) 赤澤祐美 (2019) 1900年代初頭の野球型種目に関する研究 - その多様性と女子の種目の特徴 -, 東海学園大学教育研究紀要 スポーツ健康科学部, (5), 14-23.
- 7) 高嶋航 (2019) 女子野球の歴史を再考する - 極東・YMCA・ジェンダー -, 京都大学文学部研究紀要, (58), 165-207.
- 8) 赤澤祐美 (2021) 横井春野の人物像と女子野球普及活動, 東海学園大学教育研究紀要 スポーツ健康科学部, (6), 17-23.
- 9) 鈴木江北 (1922) 女子野球夜話, 野球界, 12 (11), 54-55.
- 10) 栃木県立宇都宮女子高等学校「80年史」編集委員会 (1956) 『80年史』
- 11) 栃木県立宇都宮女子高等学校100年史編集委員会 (1976) 『100年史』
- 12) 赤澤祐美 (2022) 大正期の高等女学校における女子野球実施の実態 - 学校創立記念誌の検討から -, 国士舘大学体育研究所報, (40), 161-164.
- 13) 栃木県教育史編纂会編 (1958) 『栃木県教育史』4.
- 14) 「市立宇都宮高等女学校」も存在していたが、これ

- は昭和18年に改称されてできたもので、野球部が存在したとみられる大正9年頃は「宇都宮市立女子技芸学校」であり、高等女学校ではなかった。
- 15) 栃木県立宇都宮高等女学校同窓会 (1916)『会報』, (5).
  - 16) 栃木県立宇都宮高等女学校同窓会 (1916)『会報』, (6).
  - 17) 栃木県立宇都宮高等女学校同窓会 (1927)『会報』, (17).
  - 18) 栃木県立宇都宮高等女学校 (1920) 大正9年9月栃木県立宇都宮高等女学校要覧.
  - 19) 栃木県立宇都宮高等女学校 (1921) 大正10年10月栃木県立宇都宮高等女学校要覧.
  - 20) 栃木県立宇都宮高等女学校 (1922) 大正11年10月栃木県立宇都宮高等女学校要覧.
  - 21) 栃木県立宇都宮第一高等女学校 (1936)『創立60年』
  - 22) 栃木県立宇都宮女子高等学校90年史編集委員会 (1966)『90年史』
  - 23) 下都賀郡立栃木高等女学校々友会 (1919)『校友会誌』, (13).
  - 24) 下都賀郡立栃木高等女学校々友会 (1920)『校友会誌』, (14).
  - 25) 栃木高等女学校々友会 (1921)『校友会誌』, (15).
  - 26) 栃木県立栃木高等女学校々友会 (1924)『校友会誌』, (18).
  - 27) 栃木県立栃木高等女学校々友会 (1925)『校友会誌』, (19).
  - 28) 栃木県立栃木女子高等学校65年史編集委員会 (1966)『創立65年誌』
  - 29) 栃木県立栃木女子高等学校創立80周年記念誌編集委員会 (1981)『創立80周年記念誌』
  - 30) 前掲書21), p151.
  - 31) 前掲書16), p62, p76.
  - 32) 前掲書18), p11.
  - 33) 前掲書16), p62.
  - 34) 前掲書22), p126-127.
  - 35) 名古屋において、インドアベースボールが行われるようになったのは大正7年頃とされている。
  - 36) 前掲書23), p32-37.
  - 37) 前掲書25), p60-66.
  - 38) 前掲書25), p3-13.
  - 39) 前掲書26), p37-39.
  - 40) 中野祐子 (1987) 大正・昭和前期の舞踊教育－日本体育会・石橋蔵五郎・赤間雅彦について－, 舞踊學, (10), 24-32.
  - 41) 上野学園大学HP <https://www.uenogakuen.ac.jp/university/about/gakuen/founder.html> (閲覧日: 2023年1月17日)
  - 42) 「野球は女性の新競技」(1922)『サンデー毎日』, 大阪毎日新聞社, 1 (5), 5.
  - 43) 前掲書22), p126.
  - 44) 前掲書28), p114.